

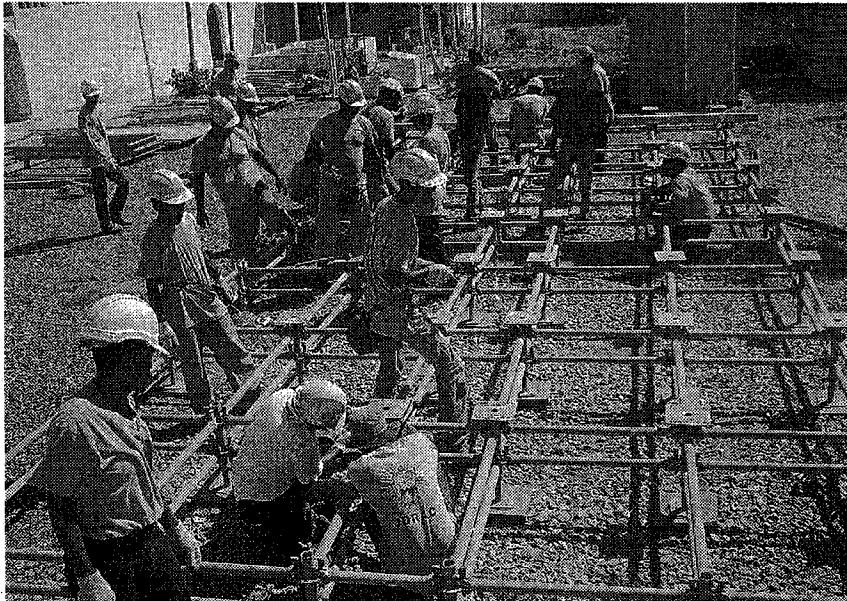
JDRAC 陸自OB、東ティモールで活動本格化

施設群が残した コンテナハウス

訓練生に組み立て指導

現地の技術者育成目指す

自衛官OBのNPO法人「日本地雷処理・復興支援センター(JDRAC)」(理事長・平崎憲昭元陸将補)が東ティモールでの活動を本格化させている。現在、3人のOBが現地入りし、陸自の派遣施設群が残したコンテナハウスを教材に、その組み立て要領を現地住民に指導。現役自衛官の仕事でOBが引き継ぐ形での復興支援活動は、東ティモール政府からも歓迎されている。



三瓶さんらの指導でコンテナハウスの組み立て訓練に励む訓練生(東ティモール・ティリ郊外)

JDRACから派遣されているのは現地代表の三瓶照男元2陸佐(元北海道旭苗穂支処補給科長)、布施和明元3陸佐(元12補給隊副長)、水田保元3陸尉(元関東旭吉河支処)。三瓶氏は平崎理事長とともに6月1日に首都ティリに入り、政府、関係者などと調整。布施、水田両氏も続いて現地入りした。その間、陸自4次隊が3波に分かれて帰国するのを現地で見送った。

ティリ宿営地のコンテナハウスはそのまま生かされた後、7月19日、「組み立て式建物技術訓練センター」として生まれ変わった。開所式には旭英昭在東ティモール大使、同国政府からアマル運輸通信公共事業大臣、アルベス公共事業官長、官、アツル・カー国連東ティモール支援団(UNMIT SET)特別代表らが出席。JDRACの活動への期待の大きさがうかがえる顔ぶれだった。

20日、同国政府、ティリ県が推薦する訓練生約20人を対象に訓練を開始した。訓練はコンテナハウスの組み立てと部材管理がメイン。コンテナハウスは5メートル×2.8メートルのコンテナを使い勝手に応じて組み合わせるもので、

最初は1、2棟、次に10棟、最終的には自前で建設や訓練センターを維持できるよう指導する。期間は約5カ月。1期生は訓練終了後、技術者として保育所などの施設建設に当たる。2期生は他の地方の人材を集め、訓練を終えた後、地元に戻って学んだ技術を伝える。

こうして増えていく技術者が、マリアナやオクン、スアイにある自衛隊宿営地跡のコンテナハウスを有効に生かしていく、というのが平崎理事長の基本的な考えだ。

訓練生には「自分は選ば

れているのは現地代表の三瓶照男元2陸佐(元北海道旭苗穂支処補給科長)、布施和明元3陸佐(元12補給隊副長)、水田保元3陸尉(元関東旭吉河支処)。三瓶氏は平崎理事長とともに6月1日に首都ティリに入り、政府、関係者などと調整。布施、水田両氏も続いて現地入りした。その間、陸自4次隊が3波に分かれて帰国するのを現地で見送った。

ティリ宿営地のコンテナハウスはそのまま生かされた後、7月19日、「組み立て式建物技術訓練センター」として生まれ変わった。開所式には旭英昭在東ティモール大使、同国政府からアマル運輸通信公共事業大臣、アルベス公共事業官長、官、アツル・カー国連東ティモール支援団(UNMIT SET)特別代表らが出席。JDRACの活動への期待の大きさがうかがえる顔ぶれだった。

20日、同国政府、ティリ県が推薦する訓練生約20人を対象に訓練を開始した。訓練はコンテナハウスの組み立てと部材管理がメイン。コンテナハウスは5メートル×2.8メートルのコンテナを使い勝手に応じて組み合わせるもので、

最初は1、2棟、次に10棟、最終的には自前で建設や訓練センターを維持できるよう指導する。期間は約5カ月。1期生は訓練終了後、技術者として保育所などの施設建設に当たる。2期生は他の地方の人材を集め、訓練を終えた後、地元に戻って学んだ技術を伝える。

こうして増えていく技術者が、マリアナやオクン、スアイにある自衛隊宿営地跡のコンテナハウスを有効に生かしていく、というのが平崎理事長の基本的な考えだ。

訓練生には「自分は選ば

一緒に活動しませんか JDRAC が会員募集

JDRACでは現在、会員を募集している。会費は0845東京都新宿区市谷正会員が年5000円、賛助会員は年3000円、法階(株)パシフィック・絵研人会員は同5万円。寄付は内 JDRAC事務局(電話03・5225・735)

「特定非営利法人日本地雷処理・復興支援センター」

口座番号0012003-1

お問い合わせはTEL6210845 東京都新宿区市谷本村町3-20新盛堂ビル2階(株)パシフィック・絵研内 JDRAC事務局(電話03・5225・735) FAX03・5225・7351、Eメールkyokiku@blue.ocn.ne.jp)まで。

425862に振り込む。

jp)まで。